

愛徳・博愛・社会主義

バルザック『現代史の裏面』の政治的意図¹

東 辰之介

バルザック晩年の作『現代史の裏面²』は、王政復古を機に数多く設立された慈善団体を題材にとって、対神徳の一つ愛徳(charité)がパリに輝きわたるさまを描いた作品である。ダンテの天国編に同じく、『人間喜劇』の地獄編ともいうべき作品群に比べて注目の度合いは少ない。「徳のある人物を興味あるものにするという文学上の難問題³」は容易に解決がつかなかったようだ。大著『バルザックと宗教』でフィリップ・ベルトーが、バルザックのカトリック理解の終着点に置いて称えるこの小説は⁴、『人間喜劇』の中でも読者に受けの悪いもっとも抹香臭い作品となった。

それでも、そもそもはモンティオン賞という「良俗に最も有益な作品⁵」に与えられる賞金を狙ったこの作品は、受賞した作家たちの教訓小説とは趣を異にしている⁶。この論考では、そこに認められる政治性、一口に言えば反動的側面を、その時事性が感じられるような形で明らかにしてみたい。

1 博愛に対する揶揄

『現代史の裏面』の中心主題の一つは、ギロチンの恐ろしい記憶である。帝政時代に公金強奪に加担した娘を断頭台の上で失った、慈善の会を主宰するラ・シャントリー夫人の前で、この「不吉な死の道具⁷」の名前が口にされることはない。そもそも大革命によって傷ついた者たちが、王政復古後に心の拠り所を求めて始めたという設定の作品中の慈善の会において、ルイ十六

¹ バルザックの作品からの引用は、すべて次のブレイアード版による。Balzac, *La Comédie humaine*, édition publiée sous la direction de P.-G. Castex, Paris, Gallimard, 1976-1981, « Bibliothèque de la Pléiade », t.I-XII.

² *L'Envers de l'histoire contemporaine*, t.VIII.

³ *Avant-propos*, t.I, p.18.

⁴ Philippe Bertault, *Balzac et la religion*, Boivin, 1942, pp.270-288.

⁵ Geoff Woollen, « Balzac et le prix Montyon », in *l'Année balzacienne*, 1983, p.179.

⁶ Geoff Woollen, « Balzac et le prix Montyon (suite) », in *l'Année balzacienne*, 1991. を参照。

⁷ *L'Envers de l'histoire contemporaine*, t.VIII, p.282.

世の命を奪ったギロチンは恐怖政治の象徴であり、正視に耐えないものなのである。あらゆる野心に敗れてこの会に新たに入ろうとしている青年ゴドフロワも、夫人の娘を死刑に追いやった起訴状を読んで、極刑のさまを悪夢に見る。

この死刑を、バルザックは「ギヨタン医師が博愛の目的から考案した⁸」という文句をすべり込ませて形容している。事実、ギヨタン医師がアンシャン・レジームの刑罰制度を改良する提案を国民憲法議会に行った時、処刑を機械装置によって一瞬のうちにを行うよう求めたのは、残虐刑から囚人を解放するための人道主義的配慮からであった。しかしながら、人間性が嫌悪する死刑という懲罰を人間性によって科すという逆説の無気味さは、当時にしても感じられたであろう。ギヨタン医師が死刑廃止を主張しなかったのは時代の要請に従ったままであり、王政復古を迎えて死刑存続・廃止に関する論争が展開されたときには、博愛主義は直截に廃止を訴えることになる。

こういった後の展開を等閑視して、悪夢のギロチンと博愛を結びつけてみせるバルザックには、博愛というものを揶揄し、貶めようという意図が認められるであろう。しかも、死刑の残虐さを博愛に結びつけようとしている作家自身は死刑存続論者なのである。当時の死刑廃止運動の流れの中で書かれたユゴーの『死刑囚最後の日』は⁹、『村の司祭』において「死刑という、この社会を支える偉大な制度に対して反対弁論を歌った陰鬱な悲歌¹⁰」と評されている。問題の箇所は、むしろギロチンが与える無気味なイメージを利用した博愛に対する中傷なのである。

この博愛批判は、理由づけは様々ながら作品を通じて一貫している。博愛主義者が環境の人に及ぼす力をばかにして無視するのは、彼らの「無知のせい¹¹」であり、博愛事業は「誠実を看板にする詐欺師に食い物にされる¹²」ばかりで、そもそも博愛は「虚栄¹³」にすぎない、散見される箇所をまとめればこのようになるだろうか。これらはすべて、小説のテーマ愛徳を対照的に称えるために引き合いに出されている。貧窮者に対して救いの手を差し伸べるという点において、二つの利他主義は共通しているように思われるが、バ

⁸ *Ibid.*, p.311.

⁹ 詳細については、Gustave Charlier, *Comment fut écrit « Le Dernier Jour d'un Condamné »*, in *De Ronsard à Victor Hugo*, Éd. de la Revue de l'Université de Bruxelles, 1937, pp.273-327. を参照。

¹⁰ *Le Curé de village*, t.IX, p.696.

¹¹ *L'Envers de l'histoire contemporaine*, t.VIII, p.279.

¹² *Ibid.*, p.324.

¹³ *Ibid.*, p.387.

ルザックのこの峻別の理由はいったい何であろうか。

フェヌロンの『死者たちの対話』(*Dialogues des morts*, 1712.)において、初めて博愛(*philanthropie*)という語がフランス語で使われたとき、それは愛徳(*charité*)と何ら対立するものではなかった。その後十八世紀前半を通じて、人間が同胞に対して覚える生来の愛着に由来するとされる博愛と、神への愛に基づくとされる愛徳は、隣人に対する援助を結果的に推奨するという共通点において認知されたようだ。しかし世紀の半ばを過ぎると、このキリスト教徒と哲学者の一致は解消に向かう。かつてサン＝ピエール神父が人に善を施すという愛徳の実践形態を表すために造った善行(*bienfaisance*)という語は、その宗教的中立性において博愛に近似しているが、この語についてモレリは「積極的に消極的にも、善行の概念はその他あらゆる概念、神性の概念さえにも先行する¹⁴」と述べている。こうして哲学者たちは、博愛の愛徳に対する優位を主張するようになる。さらに大革命前夜になると、博愛をめぐる言説は道徳の原理に関する理論的なものから、社会・政治的提言へと変化し、博愛家、市民、愛国者などの語が同義語のように用いられて通俗化が進む。博愛は革命のイデオロギーとなったわけである。このような歴史的推移を考慮すると、『現代史の裏面』において博愛が貶められる理由は、宗教的なものであると同時に政治的なものであらうと予想される。そして愛徳の実践者たちに大革命において傷ついた人物たちという設定を与え、彼らに博愛を否定させているところを見れば、政治的な理由の方が大きな比重を占めているであろうことは間違いない。ここでの愛徳と博愛の対立は何より、アンシャン・レジームと大革命の対立に重ねられており、バルザックが擁護するのはそれぞれ前者なのである。

しかしながら、1842年から1848年という二月革命前夜にあたる『現代史の裏面』の執筆時期を考えたときに、愛徳と博愛の峻別の理由をこの半世紀も前から続く政治的対立のみに求めるならば、この作品が含んでいるかもしれないより時事的な政治的意図を無視することになる。この頃競合してさかんに慈善事業を行っていた博愛と愛徳の当時の政治社会状況における位置を確かめておこう。

¹⁴ Morelly, *Code de la Nature ou le Véritable esprit de ses lois, de tout temps négligé et méconnu*, 1755, Éd. sociales, p.111. この一節は Catherine Durpat, *Le temps des philanthropes*, Éd. du C.T.H.S., 1993, t.I, p.XVII. に引用されており、この段落の歴史的概観もこの論文の序説に負っている。

2 バルザック同時代における博愛と愛徳の位置

十九世紀前半においては、ごく概略的に言って、博愛と愛徳の違いをことさらに主張するような理論的論争は下火になってきている。むしろ、この時代の精神の基調をなしていた進歩への意志を社会的に実現すること、大革命に対する評価はどうあれ拡大する貧窮層にも救いの手を差し伸べて人類の幸福を全体として増大させること、こういった目的を達成するための実践をいかに行うかということが議論の中心となっていた。理論的論争に対する相対的無関心は特に博愛を標榜する側に認められる。七月王政を迎えたときに王政復古時代の慈善事務所が « bureaux de charité » から « bureaux de bienfaisance » に改称されたことが示すように¹⁵、政府の公式イデオロギーとなった博愛に、改めて愛徳に対して論戦を挑む理由はなかったのである。

これに対して、カトリック右派からは愛徳は博愛とは違うという主張が執拗に繰り返された。トロアのブローニュ司教は「博愛の庇護の下に開設された慈善団体と愛国的な友誼¹⁶」を皮肉って、キリスト教の愛徳を称えている。「博愛は愛徳の偽金にすぎない¹⁷」と記したシャトブリアンにも博愛をひどく揶揄する姿勢に変化はない。すなわち『現代史の裏面』の政治的意図を、引き続きカトリック側から提示される愛徳＝博愛の二項による従来からの対立図式の中でとらえることも不可能ではないのである。

しかしながら、注目すべきは、この二つの理念を双方とも不十分として否定する立場が徐々に現れてきていることである。この頃台頭しつつあった社会主義運動がそれで、その影響はカトリック左派にも及んでいた。もともとサン＝シモン主義者であったが 1830 年にカトリックに改宗したフィリップ・ビュシェ(Philippe Buchez)は、産業革命によって生じた貧窮層の生活を立て直すには、愛徳も博愛も効果の乏しいその場しのぎの策でしかないとした。彼の忠実な弟子の一人で論争家であったマリウス・ランパル(Marius Rampal)は、アルペール・ガゼル(Albert Gazel)という筆名の下でこのように書

¹⁵ Philippe Bertault, *op.cit.*, p.271, n.4.

¹⁶ Mgr de Boulogne, *Sur l'excellence de la charité chrétienne*, 1821. この箇所は以下の論文に引用されている。Bernard Plongeron, « Des socialistes chrétiens avant l'âge du christianisme social », in *De la Charité à l'action sociale, Religion et société*, Textes réunis et publiés par Bernard Plongeron et Pierre Guillaume, Éd. du C.T.H.S., 1995, p.125.

¹⁷ Chateaubriand, *Le Congrès de Vérone*, 1838, t.I, p.79. 前注の論文より。Bernard Plongeron, *op.cit.*, p.124.

いている。「演壇上のわれわれの立法者も博愛家も著作や講義における統計学者や経済学者も説教壇上のカトリック司祭さえも、社会改革に反対しそれを幻想であり危険なものとして勤労階級に提示しようと競って努めている¹⁸」。また、ビュシェの弟子の一派の労働者たちが創刊した雑誌『アトリエ』は、労働者階級の自立を要求し、下層民保護という性格を持つ博愛や愛徳を拒否している。「下層階級が当然の権利として要求するのは、施し物ではないし博愛の保護でも宗教の保護でもない¹⁹」。つまり彼らにとって慈善事業一般は、掲げられた理念が博愛であろうと愛徳であろうと、労働者階級を保護の下において抜本的な社会改革を回避するための装置であり、断固拒否すべきものなのである。

上記の新しい思潮を考慮するならば、1840年代において愛徳は二つの対抗理念を持っていたことになる。一つはいまやルイ・フィリップという後ろ盾を得て愛徳を凌ぐに至っている博愛であり、もう一つはカトリック左派にまで部分的ながら浸透しつつあった社会主義の潮流である。このような状況下で愛徳の擁護者すなわち正統王朝派を中心とするカトリック右派に必要なことは、七月王政への迎合を拒否するために博愛を批判し、現状のさらなる改革を求めている社会主義を牽制することではないだろうか。ブルジョワジーの利益保護を第一にする政府が表看板としてうまく利用している面のある博愛は偽善的に、そして社会主義の方は真摯にという違いこそあれ、両者とも社会の進歩や平等を第一の目標に掲げている以上、旧秩序への回帰を願う復古主義者が両者を同じ理由で排撃するであろうことは見当がつく。

このような推測に従えば、博愛を罵倒する『現代史の裏面』がもう一つの競合相手である社会主義に対してもはっきりとした拒否を突きつけているのではないかと臆測される。実際、ラ・シャントリー夫人が主宰する慈善の会に参加するアランは、決して小説中で描かれることのない彼のこれからの仕事についてゴドフロワにこう語っている。

私自身もこの修道院から派遣されて火山の中心へと向かうのです。ある大きな工場の職工長になるのですが、そこの労働者はみな共産主義に毒されていて、そうすることが産業や商業や工場の崩壊を招くことには気づかずに、社会を破

¹⁸ Albert Gazel, « De l'Émancipation des classes laborieuses », in *Revue Nationale*, N° 4, août 1847, pp.91-95; n° 5, sept. 1847, pp.134-139; n° 7, nov. 1847, pp.197-200; n° 8, déc. 1847, pp.223-228. この箇所は J.-B. Duroselle, *Les débuts du catholicisme social en France, 1822-1870*, PUF, 1951, p.109. から引用。

¹⁹ *Atelier*, juillet 1845. 前注の論文より。J.-B. Duroselle, *op.cit.*, p.119.

壊しようとか、親方たちを殺そうとか、夢のようなことを言っています²⁰。

意味領域が拡大・分化の途上にあった《Social》という語が社会改革への意志だけでなく、社会秩序を保つために改革を阻止しようとする意志をも形容し得た当時において²¹、共産主義を批判することは誤解の余地なく社会主義の精神を批判することだったであろう。『現代史の裏面』における政治的意図の解釈は、愛徳と博愛の間にある古くからの対立という枠組みを超えて、社会主義の台頭という当時の文脈に照らして行われるべきなのである。そうした時に、読者の目に否応なく目立って映る博愛批判は、あまり目につかない社会主義への牽制と一体をなしているということが、さらには博愛が社会主義のスケープゴートになっているという構図が見えてくるであろう。

3 社会主義に対する牽制

1) 労働問題の隠蔽

産業革命の伸展に伴って、たとえ勤勉かつ健康であっても恒久的な貧困に悩まされる階層が出現した。この階層は社会主義勢力の基盤となって二月革命を起こすに至るわけだが、かれら労働者の貧困を社会構造が生み出す不可避のものとして認知し、それに対して対策を練ろうとするのが慈善事業一般の方向性であった。しかしながら『現代史の裏面』は「パリの文明がその基盤とする恐ろしい貧困²²」を描いた作品であると作者自身によって公言されながら、その貧困の主体であるはずの労働者階級は脇役として登場するばかりである。作品中における慈善活動の対象のうちで唯一詳細に描かれるのは、老人とその娘にあたる奇病に冒された寡婦とその息子からなる一家、すなわち老人、病人、寡婦、孤児といったいかなる時代にも存在した弱者の典型を組み合わせたものなのである。

この食い違いは意味深長である。すなわち、社会主義が提示する労働者の恒久的窮乏という社会問題が、有史以来人間に襲いかかることを止めない不慮の貧困にすり替えられている可能性があるからだ。もちろん、それが一方を取り上げて他方を無視するという選択にすぎないならば、すり替えではな

²⁰ *L'Envers de l'histoire contemporaine*, t.VIII, p.324.

²¹ J.-B. Duroselle, *op.cit.*, p.22. を参照。

²² *Splendeurs et misères des courtisanes*, t.VI, p.426.

く問題からの単なる逃避にほかならないわけだが、次のような箇所は上記の選択の恣意性、政治性を否定することによって、労働問題というものを他の貧窮問題から区別する必要はないという立場、つまり社会主義の言う問題は存在しないという立場を暗に正当化しているように思われる。バルザックは登場人物の一人アランにこう言わしめている。

不幸も貧しさも苦しきも悲しみも悪も、たとえどんな原因から起きたにせよ、どんな社会階級に現れたにせよ、われわれの目にはどれもみな同じ権利をもって映ります。とりわけその信仰なり意見なりがどうであろうと、不幸な人はまず何をおいても不幸な人なのです²³。

つまり、不幸や困窮の結果における等質性を主張することによって、社会階級と密接な関係を持つであろうその原因の無差別化を行い、貧窮する労働者を作品中で扱わないことに対する仮想的な批判にあらかじめ反論を用意しているのである。この労働者不在をさらに正当化するためか、同じくアランによって今度は逆に次のような差別化が行われる。

あらゆるパリの悲惨な事柄のうち最も発見しづらく最も激しいのは、尊敬すべき人たちのそれ、一家がひどい貧乏に落ち込む羽目になった上流市民階級のそれです。なぜならかれらは貧乏を隠さなければならないと思うからです。そのような不幸こそ、ゴドフロワさん、われわれの特別な配慮の的なのです²⁴。

何らかの事故によって富裕層が落ち込む貧窮の方が、そのような落差を伴わず人目に隠す必要もない下層民の貧窮よりも耐え難いとするこの判断は、確かに人間心理のそれなりに客観的な観察に基づく穿ったものだが、このように貧困を心理的な次元からとらえさせようとする自体が、問題の巧妙なすり替え策の一環ではないだろうか。貧窮の原因は問わず、それが与える苦しみの度合いに応じて慈善を施す対象の優先順位を決めるというアランのごく公平に見える規準は、実際には社会問題となっている労働者の貧窮を描写から除外した理由が政治的なものであると悟らせないための方便なのである。このような手続きを踏んでの労働問題の否定は、社会主義に対する極めて意識的で巧妙な牽制であるとは言えないだろうか。

²³ *L'Envers de l'histoire contemporaine*, t.VIII, p.324.

²⁴ *ibid.*, p.325.

2) 「社会問題」と「政治問題」

労働者が『現代史の裏面』で中心的な役割を与えられないのは以上の通りだが、先ほど言及した病人を抱える一家の主とはといえば、帝政期に検事長まで任じながら 1830 年の政変で没落した人物である。まさしく「特別な配慮の的」となるべきこの一家の貧窮は、主の娘がいくら治療費をかけても治らない病気に罹ってしまったことと、政治的災難のせいで収入が絶たれたことの二点に原因があることになる。このような原因設定は、貧困をあくまで「政治問題」とすることによって、「社会問題²⁵」からさらに遠ざかるための戦略ではないだろうか。貧困を「社会問題」ではなくて「政治問題」として扱うことこそ、正統王朝派の多くの論客に共通する論法であった。そのような論調に反対してか、カトリック中道の立場で慈善事業の推進を行ったフレデリック・オザナムは、1836 年当時の状況を書簡の中でこう規定している。

今日われわれのいる世界を揺さぶっている問題は、人物の問題でも政体に関する問題でもなく、社会問題なのです。持たざる者と持ちすぎている者の闘争が、豪奢と欠乏の激しい衝突がわれわれの足元の地面を揺さぶっているのなら、われわれキリスト教徒にとっての義務はこの二つの和解不能な敵どうしの間に身を置くことなのです²⁶。

このような立場からすれば、貧困の原因を相変わらず政体の善し悪しや、その行政的不備に帰することほど退行的で欺瞞的なことはないのであるが、『現代史の裏面』で行われているのがまさしくそれなのだ。問題の一家の主であるブルラック男爵は、こう言って七月王政下の政府を責めている。

三十年も役所勤めをした後で、恩給の取り決めに 1833 年まで待たせられました。恩給を受け取るようになったのはやっとこの半年前からですが、新政府は多くの厳しい仕打ちに、恩給の最低額しか私に支給しないという仕打ちを加えたのです²⁷。

すなわち、この作品が中心に描く貧窮の原因は、恩給の不払いあるいは出し惜しみという極めて些末な行政上の問題にいったん帰せられるのである。も

²⁵ リトレ辞典の「Social」の項を参照。「『社会の』は『政治の』に対比されるが、政府の形態を考慮の外において、庶民階層の知的、道徳的、物質的發展に関わるあり方を指す。社会問題。」

²⁶ Frédéric Ozanam, *Correspondance*, 5^e édit., t.I, p.214. (Lyon, 5 nov. 1836.) J.-B. Duroselle, *op.cit.*, p.17. より。

²⁷ *L'Envers de l'histoire contemporaine*, t.VIII, p.341.

ちろん注目すべきは、そのような待遇に甘んじざるを得ないブルラック男爵の経歴である。検事長という職によって「三十六年間社会、政府を代表し、公の報復者であった²⁸」男爵は、政変によってその地位から追放されると、一転して世間から見捨てられ「念入りに身分を隠す²⁹」必要に迫られる。いわば彼は一国の混迷期における「数知れない政治的犠牲者の一人³⁰」なのだ。つまり、高度に政治的な原因による貧困が作品における慈善対象の中心となっているわけで、このことは作品の主題に変化を加えずにはいない。ラ・シャントリー夫人たちが大革命によって傷つき、自他に慰めを与えるために始めた慈善活動の対象が、零落した帝政期の立役者の一人というなんとも皮肉な構図になっているからである。この構図はさらに、ブルラック男爵がラ・シャントリー夫人の娘を処刑台に送ったまさにその人であるという、いかにも小説的な設定によってさらに強化される。作品の結末を飾るクライマックスは、夫人が男爵に許しを与える場面であるが、二人が大革命の勝者と敗者の典型であることを考えれば、このやり取りは象徴的にフランスの国民的和解を行うものであるといえよう。

「十字架で死んだイエスの名において、お許しください！許してください！なぜなら私の娘は死ぬほどの苦しみを味わいましたから。

老人が崩れ折れたので、感動しながらその場に居合わせた人たちは彼が死んだのかと思った。その時、ラ・シャントリー夫人が彼女の部屋の入り口に亡霊のように現れた。彼女は気を失ったようにその戸口にもたれかかっていた。

「ルイ十六世とマリー・アントワネットのお姿は、今も処刑台の上に見えるようですが、そのお二人と、エリザベート王妃と、私の娘と、あなたのお嬢様と、イエス様に免じて、あなたをお許します…³¹」

つまり、愛徳の精神に鼓舞された貧窮者救済の物語が、政治的な問題の虚構的な解決という結末によって幕を下ろすわけである。ところで、ブルラック家の貧窮の方はどうなったのであろうか。病人が、ラ・シャントリー夫人の援助によって高額の治療費を請求する天才的な医者の治療を受けられることになって健康になり、男爵が司法官としての経験を生かして執筆中だった浩瀚な法学書がやはり夫人の援助によって抵当から解かれて、本屋に高く売れたことは、慈善活動の直接の結果であるといえよう。しかしながら、どう

²⁸ *Ibid.*, p.387.

²⁹ *Ibid.*, p.396.

³⁰ *Ibid.*, p.341.

³¹ *Ibid.*, p.412.

いうわけか文部大臣の報告によって、つまりは政府の推薦を受けて、男爵に比較法学の講座が開かれることになり、さらには司法大臣が男爵の娘に、元司法官の娘という資格で扶助料を払うことに決めるのである³²。今まで冷遇されていたはずの一家が急にこのような扱いを政府から受けるのは実に奇妙ではないだろうか。とにかくこうして一家は十分な定収を確保し、彼らの貧困は解決されることになる。

アランがゴドフロワにその貧困のほどを調査するよう指示したときには、奇病に冒された婦人を抱えながらも貧窮を「精力を尽くして隠して³³」いるらしい一家、言い換えれば「ひどい貧乏に落ち込む羽目になった上流市民階級」の一典型として提示されたにすぎなかったプールラック家は、実際には極めて政治的な理由で貧窮を余儀なくされている一家だった。そしてこの一家によって小説内に持ち込まれた二つの政治的問題、すなわち大革命がフランスに残した傷痕という古くからの問題と、新政府が旧政府の支柱だった人々を冷遇するというより時事的な問題が、一方はかつての敵にも援助を惜しまないラ・シャントリー夫人の赦しによって、もう一方は政府の軟化によって、両者とも解決をみることで一家の貧困も終わりを告げるのである。このような大団円は、政府に注文をつけながらも虚構的に歴史の傷を癒すという限りにおいて、党派の論理を超越した和解への意志を感じさせる。しかしながら、貧窮問題を特殊な政治問題に還元し、「政治問題」という枠組みの中で貧窮の解決を描いて見せることによって、貧窮を「社会問題」として扱うことをうまく避けているとも考えられるのである。

3) 仕事

社会主義への牽制は、当然ながら伝統的な価値の誇示・称揚によっても行われている。貧窮という社会問題を作品中ではっきりと描かないまでも、それに対する伝統的な解決策の提示を忘れてはいないのである。愛徳の精神に依拠する慈善活動がむしろその中心になるわけだが、それに加えて強調されているように思われるのが、「仕事」の重要性である。

カトリック保守層の中でも貧窮問題について早くから論じたアルバン・ド・ヴィルヌーヴ＝バルジュモン(Alban de Villeneuve-Bargemont)は、貧困を社会組織のせいにするサン＝シモン主義を批判し、そのすべての原因を道德の低下に求めたが、同じくカトリック保守層において大規模な慈善活動を主

³² *Ibid.*, p.408.

³³ *Ibid.*, p.326.

幸していたアルマン・ド・ムラン(Armand de Melun)が1845年に創刊した『慈善年報』(*Annales de la Charité*)に、「貧困、仕事、施しおよび愛徳に関する道徳的考察」という一文を寄せている。これは愛徳に関する一般的考察として創刊号のために書かれたものだったが、他の記事との内容重複を避けるために第二号の冒頭を飾ることとなった。このような経緯によって、この一文はカトリック保守の貧窮問題に対する見解の一典型となっている。

その論旨は明快である。まず、「社会的不平等と非常な苦難の新たな源泉³⁴」が文明の発展につれて生じたことを指摘し、それに対応するために愛徳も自らを強化しなければならないと述べる。ただし、愛徳は単なる善行とは区別される。なぜなら「善行はそれ自体どれほどの美点を備えていようと、宗教的理念とキリスト教の教えから切り離されるならば、また人間にとって自然な感情に与えられる単なる満足とみなされるならば、不完全な美德にすぎないからである³⁵。」さらに「われわれの社会段階に適用されるべき宗教的愛徳と、博愛という名を騙った科学の性質をよく区別する必要がある³⁶。」とされる。このような愛徳と博愛の峻別は『現代史の裏面』のそれと同じである。続けて彼が行うその科学への糾弾は次のような一節によって締めくくられる。「かれらはこんなことまで言いかねないだろう。『社会をもはや一つの巨大な産業共同体でしかないものとせよ。所有権と相続権を撤廃せよ。すべての者が財産と富の分け前を得るようにするのだ。そうすれば貧窮者も物乞いもいなくなることだろう³⁷。』」これは、はっきり名指さされていないが、明らかに社会主義に対する糾弾である。

こうして愛徳の反対陣営を一通りやっつけた後、愛徳の精神を基礎に置く穏健な改革案が並べられることになる。それは一口に言えば各自の身分に応じた慈善活動の実践であるが、それに加えて重要とされるのが「仕事」である。「愛徳と施しの掟に並んで仕事という掟がある。どちらも至高の意志によって人間に課せられたものである³⁸。」しっかり働くことによつてのみ、人は貧窮を免れる。なぜなら「人が働く力を失ったとき、彼の仕事が生計を立てるのに十分でなくなったとき、そしてまた人が労働の義務を故意に放棄

³⁴ Villeneuve-Bargemont, « *Considérations morales sur l'indigence, le travail, l'aumône et la charité* », in *Annales de la Charité*, 1845, p.81.

³⁵ *Ibid.*, pp.79-80.

³⁶ *Ibid.*, p.82.

³⁷ *Ibid.*, p.82.

³⁸ *Ibid.*, p.88.

したときに貧窮が生じたに違いない³⁹」からである。

労働者に対する自助努力の要求に終わるこの仕事礼賛は、何より現存の社会秩序を維持したままで貧窮問題を解決しようとする保守的思考の現われであるが、『現代史の裏面』の中でも散見されることになる。慈善の会と出会う前のゴドフロワは幸運によって成功をつかもうとして何も得られず、財産ばかり失うこととなったが、偶然再会した同窓生にこんな忠告を受ける。「社会生活というのは土地のようなもので、努力に応じて収穫があるものなんだ⁴⁰。」この同窓生に言わせれば、運や才能に頼らずにただこつこつと仕事をこなすことだけが確実に収入を得る方法なのだ。この仕事をきちんとこなせ、という忠告は慈善の会が援助を行うときに相手に与える言葉でもある。アランは詩人ヴェルニセに大金を貸し与えてこう言っている。「とにかく働きなさい。そして何にもまして、作品の中で決して宗教を攻撃したりしないように⁴¹。」そして逆に、労働という義務を果さずに成功したとみなされる者は小説の語り手によって遠慮なく断罪されることになる。「新聞の持ち主になるということは、つまり名士になるということである。他人の知性を搾取し自分では働くことなく楽しみの分け前だけに与ることである⁴²。」労働は生活に必須の活動であるばかりでなく、それを怠ることが不徳となるような道徳的義務でもあるとされるのである。

上記のようにうたわれる仕事という掟は、まさしくラ・シャントリー夫人の館で遵守されている。初めてそこに足を踏み入れたゴドフロワが最初に目にするのは、仕事をする召し使いの姿であった。「その最初の部屋では、浮き出し模様のある筒型ひだくくらいしか飾りのない麻の縁なし帽をかぶった召し使いが小さなランプの明かりで仕事をしていた⁴³。」この描写が予告するかのよう、館はその表面上の静けさの下に活気のある仕事場を隠していることが明らかになる。それはむしろ大規模な慈善活動であるが、むしろラ・シャントリー夫人が寸暇を惜しんで針仕事をする場面の方が注目される。「そして彼女は脇掛椅子に腰を下ろし、手前の小さなテーブルから布切れを取り上げて、まるで賃仕事でもしているかのように縫い始めた⁴⁴。」なぜなら、ここで問題になっているのは明らかに針仕事そのものではなく、たゆまず仕

³⁹ *Ibid.*, p. 89.

⁴⁰ *L'Envers de l'histoire contemporaine*, t. VIII, p. 224.

⁴¹ *Ibid.*, p. 253.

⁴² *Ibid.*, p. 220.

⁴³ *Ibid.*, p. 227.

⁴⁴ *Ibid.*, p. 242.

事をするという生活のあり方だからである。

仕事という掟を説き、その掟の遵守の姿が描かれるばかりではない。そもそも人間は生きがいとして仕事を必要とするのだということが示唆される。貧乏暮らしとはいっても何とか利子収入でやっていけるはずのゴドフロワは、まだ館の住民の仕事内容を知る前から、自分もそれに加わりたと思うようになる。

「幸せになるのにたった一つ足りないものがあります」と、ゴドフロワは言った。

「へえ、何ですか」と銀行家きがいた。

「仕事です」

「仕事！」と、ヴェーズ司祭が繰り返した。「すると、ご意見が変わったのですね。休息を求めてわれわれの僧院に来られたはずですから…」

「修道院に命を吹き込む祈りや、テーベ近郊に隠者を住み着かせた瞑想がなければ、休息は病気に変わります」と、ジョゼフ氏が格言調に言った⁴⁵。

この願いが聞き入れられて簿記の勉強を始めることになったゴドフロワは、彼自身の予想通りというべきか、生活により魅力を感じるようになる。語り手はこう述べている。「決まった時間に同じ仕事に戻ってくるということ、この規則正しさは多くの幸福な生活を説明し、また修道会の創設者たちがどれほど人間の性質について深く考察したかを証拠立てている⁴⁶。」規則正しく働くことそれ自体が快適な生活をつくるというこの主張は、労働の義務を辛いものではなく楽しいものとして提示する。これは、とにかく仕事をせよ、という貧窮者に対する説教を美化するのに都合が良い。つまり、労働問題に対する保守的な解決策を受け入れさせるのに絶好の人間観なのである。

『現代史の裏面』は、労働者階級における貧窮問題の解決は労働者が自分の技術を向上させ、仕事をきちんとこなすことによって成し遂げられる、というような主張をしているわけではない。その点はヴィルヌーヴ＝バルジュモンの論考とは一線を画している。しかしながら、以上のように仕事という義務をうたいあげ、絶え間なく働く登場人物を描写し、労働の楽しさを説くことで「仕事」を聖化し、保守的見解を擁護していることに変わりはない。もちろん、これを単に道徳・教訓小説の一般的な特徴として読み過ごすこともできるが、作品が全体として持っている政治的傾向をかんがみるに、そこ

⁴⁵ Ibid., p.251.

⁴⁶ Ibid., p.255.

により時事的な政治的意図の反映を読み取ることも不可能ではないのである。

*

以上、愛徳の精神を描いた『現代史の裏面』が持ち得る時事的な政治的意図を、博愛や社会主義に対する数箇所のあからさまな中傷を手がかりにして推察し、その保守的立場を擁護するために、労働問題の隠蔽、社会問題の政治問題へのすり替え、および勤労という美德の宣伝といったことが行われていることを示そうと努めた。

しかしながら、テキストにおける隠蔽やすり替えを実証的な形で指摘するのは非常に困難なことであるのは確かである。なぜなら、隠蔽やすり替えと言ったとき注目されているのは何かの不在であるわけだが、不在に積極的な意味を見出すためにはそれがよほど不自然なものと感じられなければならないからである。少し間違えれば、無限に指摘できる様々な不在を理由に、到底不可能な解釈をテキストに押し付ける結果となってしまう。

ただ、ここで指摘しておきたいのは、政治的言説においては自分の主張に不都合な問題を故意に無視することが常套的な戦略であるということである。反対陣営の提示する問題を問題として認めることは往々にして負けを認めるのに等しい。必要とされるのは、問題の所在をずらし、原因のスケープゴートを探し、自陣にとって有利な解決策を提示することなのである。そもそも政治弁論や法廷弁論をその起源の一つに持つ文学というものが政治的意図を持って書かれたときに、上記のような技巧が駆使されるのはいかにも自然なことであろう。『現代史の裏面』が政治性を帯びているということがいったん認められたならば、そこに不自然な不在を探してみることは、それほど無意味な作業ではないように思われる。そうすることによって、行間からはっきりとした政治的意図が現れてくるのではないだろうか。